



令和4年(2022年)10月10日発行

1~9...特集 まちの賑わい、明日へつなぐ。
10...インフルエンザ予防接種 11...テレワーク施設をご紹介
13...施設ご利用ガイド 14...ひまわり 15...11月の相談

「指定ごみ袋」欠品で臨時措置▶10/28まで実施中 (P11)

発行/名張市 秘書広報室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1 ☎ 0595-63-7402 FAX 0595-64-2560 ✉ pr@city.nabari.mie.jp



地域内外から新たな出会いを生んでいるテレワーク施設「FLAT BASE (フラットベース)」



かつて空き家だった場所に人が集まる



町家の雰囲気を残す落ち着いた空間

特集

明日へつなぐ。まちの賑わい、

昭和40年代以降、宅地開発により人口が急増した名張市。今後、高齢化や人口減少が進む中、地域の担い手が減少し、空き家が増えていく見込みです。まちの賑わいを失ってしまわないように、今、何ができるのか……。今号は、人とつながりながら、地域活性化に取り組んでいる皆さんをご紹介します。

「名張のまちなかに、「ふらっと」人が集える居場所が誕生

名張のまちなかにある、空き家を再生したテレワーク施設「FLAT BASE (フラットベース)」。「ふらっと」人が集まって、想いと縁が広がる場所。アットホームさが自慢です」と、管理者の北森仁美さん。イベントや教室、打合せなど、用途を限定しない貸しスペースとしても活用され、3月のオープン以来、さまざまな人の出会いを生んでいます。

7月のある日、兵庫県在住の新婚夫婦がやってきました。曾爾高原で結婚記念の撮影をするための「着替えスペース」として使用するということです。「事前に相談があり、想定外の利用で驚きま

したが、できる限りのことはしたい」。そう考えた北森さんは、布を縫い合わせて着替えスペースを作ったり、近所の床屋から大きな鏡を借りてきたり……。とても喜んでくれて、今度ゆっくりと名張を訪れたいと言ってくれました。少しずつですが、こうした縁を積み重ねていきたい」と北森さん。実は、この施設は以前、北森さんの義母が住んでいて、「この家が賑やかに使っていくともうれし

「人口が減っていく中、地域の内外に多様なつながりを

「生まれ育った名張で子育てをしたい」と思い、Uターンしました。でも、まちに人がいない。空き家が増えている。建築士としての経

験を生かしながら、子どものころのような賑やかなまちを取り戻したいと思いました。そう話すのは、空き家を活用したまちづくりを進める一般社団法人「つなぐ」代表理事の野山直人さん。法人名には「まちと建物、人を未来へつなぐたい」という思いが込められています。空き家を地域に開かれた場にしたいと考えていた北森さんと出会い、共同で「フラットベース」を整備しました。

「人口が減っていく分、人と人がもつとつながっていく必要があるのでは。誰かに出会って、新しいことが始まる。そんなことがこの場所です。起りつつあります」と野山さん。空き家だった施設がいま、まちの賑わい創出に向けて、新たな道を歩み出しました。





地域おこし協力隊
長谷川 幸太郎 さん

名張地区の活性化を担う「地域おこし協力隊」として、昨年、家族とともに東京から赴任。ここにはスタッフとして潜入し、新たな人脈づくりにも余念がない(P11にも登場)



東京との2拠点生活
福地 康弘 さん

東京と名張の2拠点生活を送っていて、ここを名張の新たなつらぎの居場所としている。自家菜園で育てたパジルはスタッフにもおすそ分けして好評だ



まちづくりを学びたい
杉田 香乃 さん

名張を愛する奈良県立大学3年生。(一社)「つなぐ」の設立メンバーでもあり、空き家の改築などにも参加。「生」のまちづくりを学ぼうと、スタッフとしても関わる行動派



まちづくりの扉をたたく
立山 和樹 さん

「子どもたちの居場所をつくりたい。ここなら何かできそう」と、FLAT BASEのSNSを見て梅が丘からやってきた。花火大会当日に、スタッフと子ども向け企画に初挑戦



東京版 FLAT BASE !?
瀧島 忠典 さん

東京都羽村市の観光協会理事。ここで人がつながっていく様子を目の当たりにし、東京版 FLAT BASE の設立を目指す。非常勤講師を務める法政大学の学生と名張をつなぐ構想も



鳥羽からふらっと…
佐藤 創 さん

東京出身、鳥羽市在住の元地域おこし協力隊で映像作家。ここで開催された講座の講師に招かれて以来、立ち寄るように。スタッフからは「はじめちゃん」の愛称で慕われている



ご近所さん
角田 康代 さん

ここで週2回実施されるラジオ体操に休まず通う91歳。元民生委員で地域の配食ボランティアなどにも参加。体操後のティータイムでのおしゃべりも楽しみのひとつ

いろいろな人たちが、
いろいろな目的をもって、
いろんなところから
フラットベース
この場所を訪れます



フラットベース 大人の秘密基地へようこそ!
FLAT BASE 管理人 野山 直人 さん
FLAT BASE 管理人 北森 仁美 さん



鳥羽で地域共生を目指す谷水さんと野山さんの想いが重なり意気投合。隣で話を聞いていた大学生の杉田さんがフィールドワークを依頼して、後日実現!



「花火大会の日にだれが一番盛り上がる？」をテーマに、壮大なミニゲームを繰り広げた。子どもたちの喜び顔を見て、大人たちが一番盛り上がったかも!?



この日はフラットベースを拠点に、名張高校の生徒とスタッフが一緒にまち歩き。地域の皆さんのお話も伺いながら、まちの活性化を考えてもらいました。



市内の子育てサークルが普段の活動場所を離れ、メンバーの保育士や助産師などによるオリジナル講座や緑日遊びを開催。新たなパパ、ママ友の交流が生まれました。

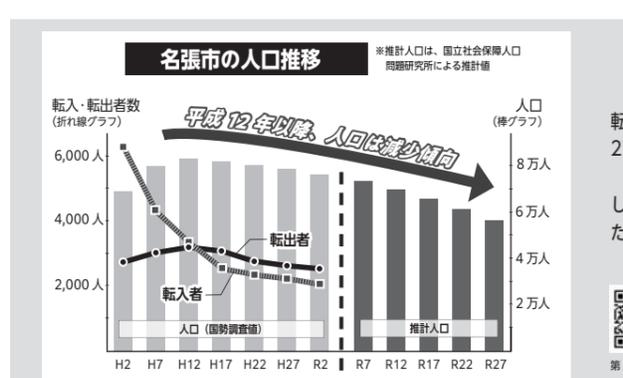
特集 まちの賑わい、明日へつなぐ。地域の内外から人が集える場所を

想いと縁をつなぐ

空き家を改修したテレワーク施設「FLAT BASE(フラットベース)」(元町)には、地域の内外から人が集い、さまざまな想いと縁をつないでいます。



まちの賑わい創出の力を握るまちへの愛着をもつ「関係人口」
まちの賑わい創出に向けて重要なのは、移住者や観光客を増やすことばかりではありません。地域内にルーツがある人や、地域に情熱や想い、愛着をもつ人(関係人口)をいかに巻き込んでいけるかがポイントとなります。「フラットベース」を管理する北森さんと野山さんは、実は、旧市街地に住んでいるわけではありません。「名張は、住宅地や村落部、旧市街地という顔顔があって、自分の関心に合った活動の場を選べる場所」と北森さん。「地域の人が集える場があり、外からも気軽に人がやってくる。そうやって、まちの中にいろんな人が馴染んでいけばいいですね」と野山さん。
オープンから半年が経過した「フラットベース」9人のスタッフとともに、「関係人口」を紡ぎながら、まちに変化をもたらしています。



地域課題と市の取組 ① 「人口減少」
名張市の人口は平成12年をピークに、平成13年以降、転出者数が転入者数を上回る「転出超過」が続き、令和27年には6万人を下回ると予測されています。
市では、令和2年に、第2期目となる「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定。人口減少を食い止めるため、働く場の確保や、都市部からの人の流れをつくること、結婚・出産・子育ての希望をかなえることなどを基本目標として、さまざまな取組を推進しています。
地域活力創生室 伊奈 真由美

空き家を学習教室やたこ焼き屋として活用していると、「この空き家も使ってくれへんか」という声をいただくように。空き家を維持管理するだけでなく、地域が賑わい、ビジネスにも結びつくような活用方法を所有者とともに考えます。こうした地域活性化に向けた取組を積み重ね、子どもたちにとって、将来の可能性を見出せる地域を築いていきたいですね。

でも、地域の中で「あいつら勝手なことやっ

て」となれば、円滑に事が進まなくなってしまいます。地域一丸となって私たちの活動を応援いただいているからこそ、いろんな事業にチャレンジできる。また、若者同士の横の連携があることも大きな力となっています。

他地域の人に「若者の参画を進めるには？」と聞かれますが、平日昼間に会議が行われていたりすることも…。従来の慣習を一つひとつ見直ししていく必要があるのではないのでしょうか。

地域の支えがあると、
いろんなアイデアが
形になっていく！



(一社) 滝川 YORIAL
重森 洋志 さん

「地域の役に立てれば」と空き家で学習教室を開いた大学生と
空き家を借り上げた(一社)「滝川 YORIAL」の皆さん



大学生が地域の課題や魅力を探る「YORIAL」プロジェクト。現地案内や聞き取り
などに地域の皆さんが全面協力。大学生は空き家の多さに驚き、その活用を提案した



特集 まちの賑わい、明日へつなぐ。▶ 地域活性化に若者の力を

若者と地域をつなぐ

「何をするにしても若い人を巻き込んでいこう」と、若者(主に子育て世代)の活動を支援している赤目地域。
空き家や耕作放棄地の活用など地域の課題解決に向けて、若者の力が発揮されています。



PTA・学校・地域がスムーズに連携

PTA会長、小学校長、区長などが「青少年育成部会」を構成しているので、何をするにも調整がしやすい！顔の見える関係だから「無理のない程度で」と気軽に助け合えるのもいいところですね。赤目地域では独自に、PTA役員経験者による「PTA運営評議会」を5年前に設立し、現役員とともに活動しているので、地域との連携もうまく引き継いでいけるし、若者同士の新たなつながりも生まれていますよ。



元小学校 PTA 会長
富森 康宏 さん

「みんなで助かるまちづくり」を

子どもやお年寄り、車いすの人など、それぞれの視点で防災を考えておくことが大切です。地域ぐるみの防災訓練は重要な機会なので、消防団もしっかりサポートします。また、地域の催しに消防団が参加したり、消防団OBに支援いただいたりと、地域のつながりを大切にしながら、災害時に迅速な対応ができる体制を築いています。今後も、自助と共助で「みんなで助かるまちづくり」を進めていきます。



消防団 赤目分団
濱地 俊宏 さん



赤目まちづくり委員会
会長 藤村 純子 さん

若者の声にしっかりと
耳を傾け、挑戦できる
雰囲気をつくらなくたい

まちづくりの担い手不足はじわじわとやってきます。高齢者などの生活支援組織「あんしんねっと赤目」でも、利用者が増える一方、ボランティア会員数は横ばいのままです。そうした中、赤目まちづくり委員会前会長の「若者や女性が積極的にまちづくりに参画できる体制づくり」といった考えを引き継ぎました。

コロナで中止になりましたが、夏祭りの運営を若い人たちに任せると、高校生がポスターを作ったり、子どもが盆踊りに参加できる

ようにしたりと新しい試みも企画されました。「今まではこうだったから」と頭ごなしに否定せず、シニアの側から、しっかりと聞く耳を持つことが大切。若い人たちのチャレンジを温かい目で見守っていきたくですね。

もちろん、従来の事業を180度変えてしまおうとしているわけではありません。いろんな世代の人の発想を生かして、失敗も繰り返しながら、少しでもいい方向にまちづくりを継続していければと思うのです。

空き家で学習教室を開く!?
赤目地域にある空き家で学習教室を開いた大学生がいます。「授業料が高かったり、通えなかったりして塾に行けない子もいる。自分ができることを生かして、地域の役に立てばうれいれいですがね」と話すのは、三重大学2年生の富森一汰さん。現在は、友人2人とともに、10人の地元中学生を安価な授業料で教えています。空き家を借りたのは、地元の青年会メンバーが立ち上げた一般社団法人「滝川 YORIAL」(よりあい)でした。資料の代わりに建物の維持管理を行って、大学生に活用してもらっています。「空き家を譲った後に、近所に迷惑がからないか心配している人が多い」と代表理事の重森洋志さん。「祖父母の代から顔なじみ」の信頼関係がある強みで、空き家の活用を円滑に進めていくことができます。「滝川 YORIAL」は、閉鎖寸前だった赤目四十八滝キャンプ場の運営を皮切りに、地域資源の



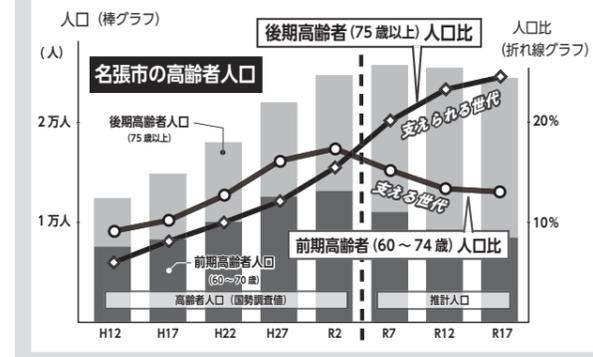
「子どもたちの居場所になれば」と、小学校近くの空き家をたこ焼き屋として活用

掘り起こし、空き家や耕作放棄地の活用、集客イベントの開催など、地域課題解決に向けた取組を進めています。



地域で広場を整備。若者たちもイベントなどに積極的に活用し、地域を盛り上げていく

地域課題と市の取組 ② 「担い手不足」



高齢化が進む名張市では、これまで主に地域の活動を担ってきた60~70歳前後の「支えられる世代」が減少。75歳以上の「支えられる世代」が増えていき、地域の事業や役員選考のあり方など、従来通りではうまくいかない地域が出てくることも考えられます。

市では、地域間の情報共有を図ったり、市の現状や先進事例などを知ってもらうシンポジウムや研修などを開催したりしています。

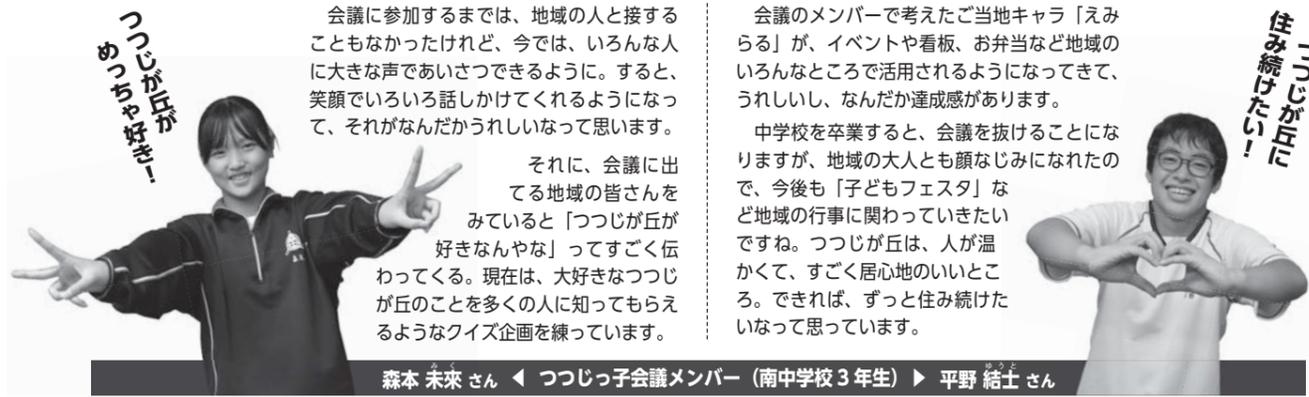


シンポジウム資料など

問 地域経営室 63-7484



地域経営室 室長
中木屋 恵理子



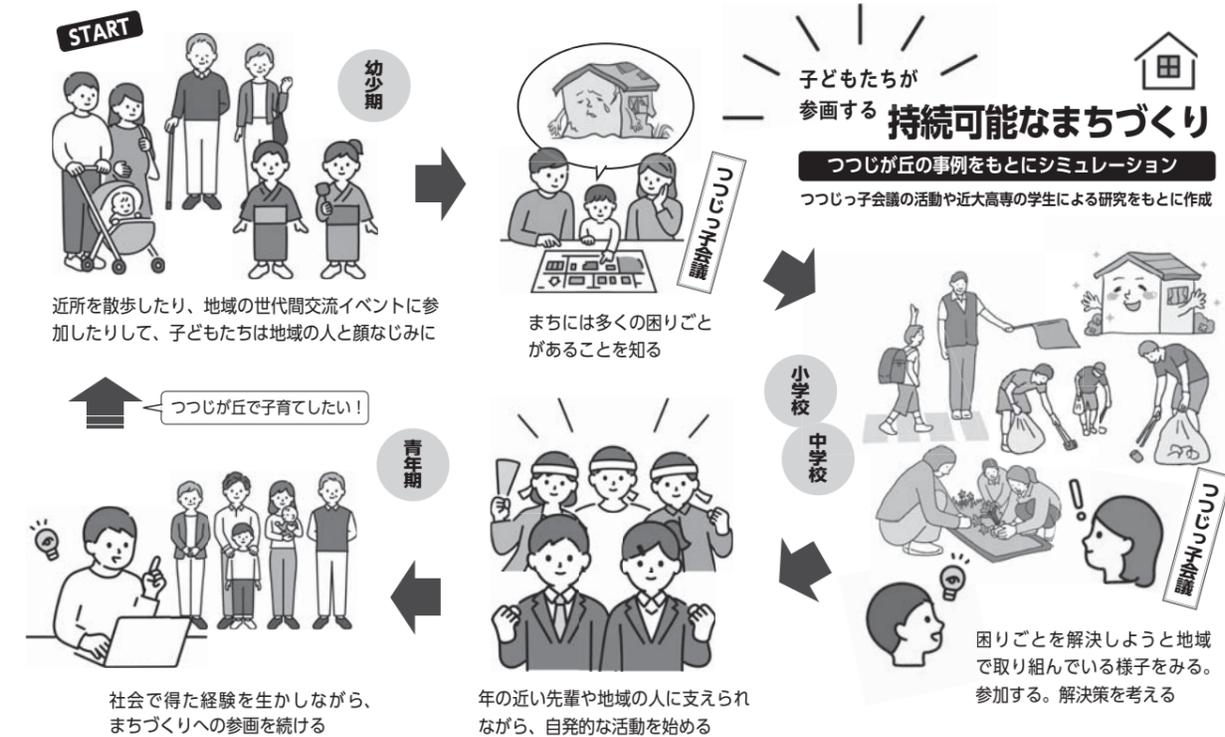
会議に参加するまでは、地域の人と接することもなかったけれど、今では、いろんな人に大きな声であいさつできるように。すると、笑顔でいろいろ話しかけてくれるようになって、それがなんだかうれしいなと思っています。

それに、会議に出て地域の人と接しているうちに「つっじが丘が好きなんやな」ってすごく伝わってくる。現在は、大好きなつっじが丘のことを多くの人に知ってもらえるようなクイズ企画を練っています。

会議のメンバーで考えたご当地キャラ「えみらる」が、イベントや看板、お弁当など地域のいろいろなところで活用されるようになってきて、うれしいし、なんだか達成感があります。

中学校を卒業すると、会議を抜けることになりましたが、地域の大人とも顔なじみになれたので、今後も「子どもフェスタ」など地域の行事に関わっていききたいですね。つっじが丘は、人が温かくて、すごく居心地のいいところ。できれば、ずっと住み続けたいなと思っています。

森本 未来 さん ◀ つっじっ子会議メンバー(南中学校3年生) ▶ 平野 結士 さん

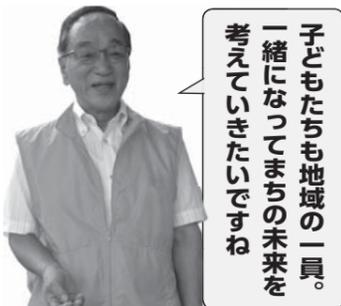


この夏、自治協議会では、子どもたちの学習の場として集会所を開放。お茶やお菓子を用意したのに、ほとんど利用されなかったんです。なるほど、子どもたちに利用方法を考えてもらった方がよかったなと。子どもを地域の一員と捉え、一緒に考えることが大切だと改めて思い知らされましたね。

「つっじっ子会議」は、そんな子どもたちの声を聞ける大切な場。真剣に耳を傾け、どうすれば実現できるのか、また、実現が難しいければ、なぜ難しいのかをきちんと伝えます。ある日、子どもたちが「溝にごみが詰まっているよ」と市民センターへ知らせてくれて、一緒に掃除したこともあります。地域の困りごとを自分事と捉えてくれたことがすごく嬉しかったですよね。

空き家の問題は、深刻に受け取っていて、定期的な調査を実施しているほか、近大高専の学生による調査結果を地域の広報紙でも連載。一人ひとりに危機感を持ってもらうことから始めていこうと考えています。

これからも、子どもや女性、若者を巻き込みながら、空き家問題を含みさまざまな地域課題に取組み、子どもたちが大人になったとき、つっじが丘に住みたい、戻りたいなと思えるような、賑わいあふれるまちであり続けたいと思います。



つっじが丘・春日丘自治協議会 会長 大内 房雄 さん

子どもたちも地域の一員。一緒に考えていきたいですね

空き家対策は現状把握から

近畿大学工業高等専門学校 教授 立神 靖久 さん



空き家は個人の財産ですので、他人が勝手に手入れできません。だからと言って放置するのではなく、まずは、現状を把握し、地域内で共有することが大切です。そして、自分の家が空き家になった際の対応を考えておく意識を高めていくなど、地域ぐるみで取り組んでいく必要があります。

特にニュータウンの空き家は、都会の移住者が望む田舎ならではの景観や畑などの付加価値がある物件が少なく、根本的には人を流出させない取組が求められます。地域の協力を得て、つっじが丘の空き家の状況や互助の取組を調査・研究した本校の学生もまた、「子どものころからまちづくりに関わり、将来的にここで子育てをしたいと思える循環をつくること」の必要性を訴えています。



特集 まちの賑わい、明日へつなぐ。▶ 子どもにまちへの関心を

まちを未来へつなぐ

地域に愛着を持ち「将来はここに住みたい・戻りたい」と思える持続可能なまちを目指して、つっじが丘では、子どものうちからまちづくりに参加する機会を設けています。

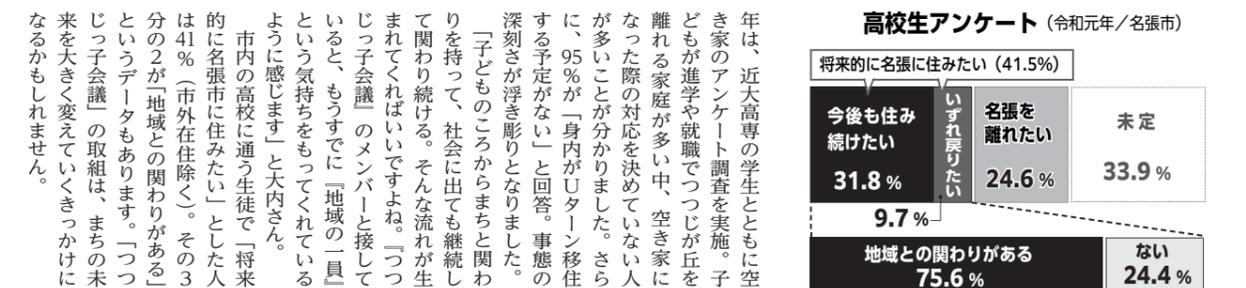
子どもと大人が地域の課題を話し合う「つっじっ子会議」

「最近はいいさつをする子どもが多くなったね。そう話すのは、つっじが丘・春日丘自治協議会会長の内房雄さん。地域ぐるみのあいさつ運動は、平成29年に発足した「つっじっ子会議」という小学生と大人たちが地域の課題を話し合う場から生まれました。「あいさつが飛び交うまちにしよう」と、子どもたちが地域を練り歩いたり、あいさつを呼びかけるティッシュを配ったり、まちじゅうに看板を立てたり。大内さんは「地域のために、子どもたちからいろいろ提案してくれま。できるだけ、一緒に実現させていきたいですね」と嬉しそう。あいさつ運動をはじめ、地元のイベント企画や、ご当地キャラ「えみらる」の制作、子どもたちの考えた標語入りの交通安全看板の設置など、話し合われた内容が一つずつ実現されています。そんな様子を見て、会議設立時に中学生2人だった参加者が、現在では約50人にまで増えています。

子どもたちが、まちに関わり続けたいと思えるように

「空き店舗で地元の新鮮野菜を売りに出しているのか。会議で子どもたちからそんな提案が出されました。「空き店舗や空き家、空き地の活用など、実現にはハードルが高い課題もあります」と大内さん。

つっじが丘では、独自に空き家や空き地の把握に努めていて、昨

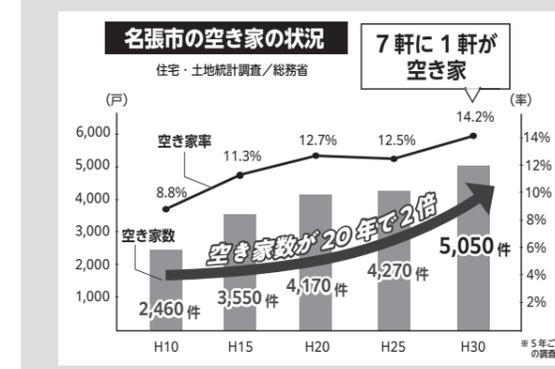


地域課題と市の取組 ③ 「空き家」

適正に管理されていない空き家は景観を損ねるだけでなく、害獣の生息や放火、不法投棄、建物部材の落下などの問題を引き起こします。

名張市の住宅総数の実に7分の1が空き家という状況の中、市では、「空き家バンク」による空き家売買のサポート(8月末現在の登録件数…251件、成約件数…176件)や、移住者向け中古住宅改修に対する補助、危険な空き家の除却補助などの取組を進めています。

問 営繕住宅室 63-7740 浪花 武志



特集 まちの賑わい、明日へつなぐ。

あなたにとって「賑わいあるまち」って、どんなまち？

このまちと、これからも。



同級生の3人が、毎朝、朝日公園などでラジオ体操を始めた！SNSで参加者を募る彼らは「思いきって行動に移せば、いろんな人とつながっていける」と意気込む。8月の「24時間体操チャレンジ」には、のべ90人が参加。こうした一つひとつの取組がまちに活力をもたらしている。

(左から中基紀さん、山下 哲平さん、岩本 和隆さん)

活動の様子 (Instagram)

みんなで名張の魅力を発信！

#名張感動 投稿キャンペーン

昨年(2021年)の投稿作品

詳しくは市HPで

今年で3年目！四季折々の絶景や家族でのわくわく体験など、名張で撮影した魅力ある作品を「#(ハッシュタグ)名張感動」を付けて、SNSで投稿・拡散してください。

投稿いただいた作品は、市の「シティプロモーション」に活用させていただくことも。「#名張感動」を合言葉に、地元の魅力を周りに伝えて、みんなで名張を盛り上げていきましょう！

地域活力創生室 ☎63-7782

Instagram・TikTokで「#名張感動」を付けて投稿 投稿期間 12/5まで

市の公式ページをフォローしてね！

抽選で20人に、なばりのお菓子セットをプレゼント

巻き起こる移住者旋風

上高原 由佳さん

2年前に名張へ移住。人のつながりを大切に、農業に親しんでいる



無 農業米を作る92歳の大ベテランに農業を教わろうと、大阪から名張へ移住。農業が軌道に乗ってくる中、今年からは、親子連れなどを対象に田植えや稲刈り体験を始めました。農業のやりがいや食の大切さを感じてもらえたいと思います。

余 ったトマトの苗をみんなに育ててもらう「トマトチャレンジ」という企画も実施。SNSで募集すると、県内外から25人が参加してくれました。育て方を伝えているうちに会話も弾んで、私自身が一番楽しんでたかもしれません。

全 国の人に自慢したくなるおいしいお米に野菜、そして、人の温かさ！もう、このまちにぞっこんです。「自分がいいな」って思ったことを、みんなと共有できれば、新しい輪が広がっていくんですよ。そんな人が少しずつでも増えていけば、まちはもっと賑わうかと、楽しくなっていくんじゃないかな。

商店街に灯をともし

細川 智之さん

空き店舗で地元産野菜などを販売する「おひさま市場」を開催



かつての桔梗が丘商店街は、人や車が通れないほどの賑わいで、店主とお客さんの交流も盛んでした。地域の人のつながりの中心が商店街だったように思います。今は閉まったままのシャッターが目立ち、行き交う人もまばら。このままではアカン…。そんな気持ちがこみ上げますね。

移 動手段がなくて買い物に困っている人のために始めたのが「おひさま市場」です。週に2日、空き店舗で開催。荷物を持ってあげたりしながら、お客さんとコミュニケーションも。「市場ができてよかった」と言ってもらえると励みになります。

月 に1度は、他地域のカフェなどにも出店してもらう「マルシェ」を開催。若い人の姿も多く、普段から市場を利用いただいている人も家族を連れて来てくれたりと、皆さんに応援いただいています。商店街に少しずつでも活気を取り戻せるよう、地道に取組を続けていきたいですね。

離れても百合が丘の一員

八木 知夏さん

信州大学2年生。育った地域を大切にしたいと、帰省した際に地域の活動に参加している



忘 れられない「百合子どもクラブ」主催のキャンプ。クラブに関わる地域の大人たちが全力で遊んでくれました。こうした活動を通じて、まちじゅうに知っている大人がいたことは、このまちに住む安心感につながっていたんだと思います。

小 学校卒業後も子どもクラブに関わりたくて、地域の皆さんと一緒に活動をサポートする側に。今では30人を超えるクラブ出身者がこの輪に加わっています。地域のいろんな人と関わることで新しい自分が見つけられる。子どもたちにも、そう感じてもらえたらと思います。

今 は百合が丘を離れて暮らしていますが、地域の一員として、私の居場所があると感じます。イベント企画にもオンラインで参加できますし、人と人との関わりの中でこそ、まちの賑わいが生まれていくのではないのでしょうか。これからも百合が丘の活動に積極的に関わっていきます。

文化祭×学園祭×音食祭

佐山 天晟さん 小澤 澤々さん

伊賀地域の学生手作りのイベントを発案・実行した高校生



学 校行事がコロナで次々と中止に…。自分たちの青春は自分たちで作ればいい。そんな思いで、昨年の秋ごろからLINEを使って仲間を募っているうちに、友達が友達を呼び、中学生から大学生までなんと50人の実行委員が集まりました。

音 楽やダンス、食などが一緒に楽しめるイベントを目指し、仲間たちと試行錯誤。地元の企業にも出店や協賛してもらいながら、ひとつずつ自分たちの思いを形にしていきました。こうした中、仲間同士の絆も深まりましたね。

7 月に開催のイベントには子どもからお年寄りまで約3,000人の来場者が。オリジナルのテーマソングを披露した後、大空へ放った風船を見上げて歓声を上げるみんなの姿を見ると、自然と涙が溢れてきました。来年は伊賀市で開催予定。今からもう準備に入っています。さらにレベルアップして地域を盛り上げますよ。

名張の素敵発見

美山 莉香さん

デザイン会社経営。スキルを生かして名張の魅力をHPなどで発信中



都 会にあこがれて、名張を出ていった時期もありましたが、帰郷して子どもが生まれたときに気付いたんです。安心・安全な野菜や食品が、名張だとこんなに手に入るんだって。これを広く伝えていこうと、地元農産物や農家さんの魅力を発信するウェブサイト「nanowa(なのわ)」の運営に携わり、もう5年が経ちます。

名 張と言えばこれ！という特徴はないかもしれないけど、豊かな自然においしい食べ物、万葉の歴史…。実はたくさん魅力があって、新しい発見を楽しめるまち。今では、女性の在宅ワーク支援の一環で、2人のママさんと一緒にイベントやグルメ、お出かけスポットなど幅広い情報を「nanowa」を通じて発信しています。

市 内外の人に名張の「素敵」をたくさんみつけてもらって、名張っておもしろそう、住んでみたい、住んでよかったという人が増えていくといいなと思います。

人と人とのつながりを大切に、「賑わいあふれるまち」へ



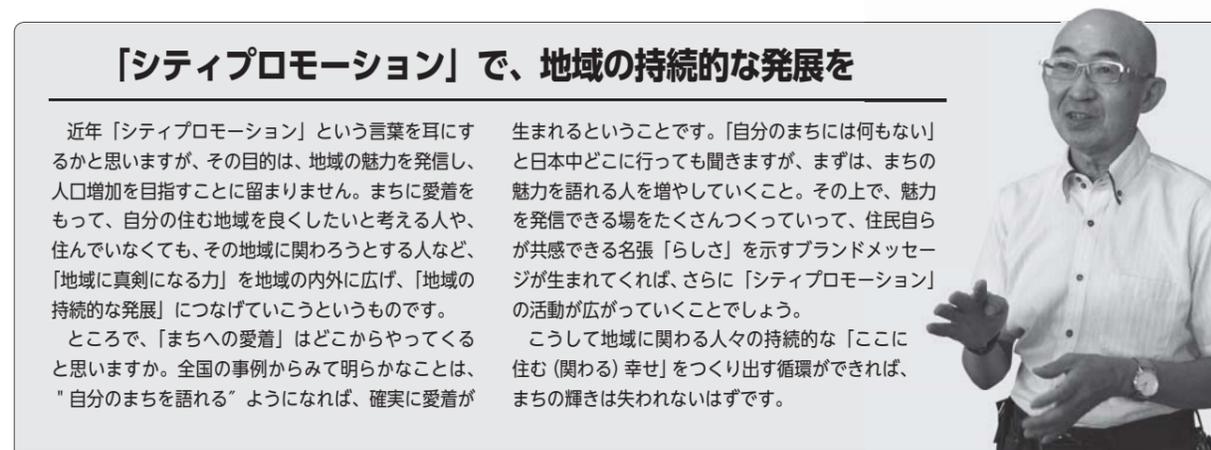
名張市長 北川 裕之

通勤・通学に不便。働く場所がない。こうした理由で多くの若者が名張市から転出している中、大阪・関西万博をきっかけに、食と観光を基軸とした新たな観光産業を築き、魅力的な働く場を創出していきます。また、新しい総合計画の策定にあたり、若い人々と意見交換していると「まちづくりに関わるチャンスがない」といった声も。意欲ある学生や若者がチャレンジできる機会が必要で、例えば、県内の大学生が地域課題の解決に向けて取り組む「三重創生ファンタジスタ」といった制度の活用なども検討しています。

「まちの賑わい」は、商業・観光施設の誘致や一過性のイベントなど、単に人を集めるだけで形成されるものではないはず。まちに愛着をもった人がつながり、コミュニケーションが活発に行われ、まちの将来に主体的に関わる人を増やしていくことこそが重要なのではないのでしょうか。人と人とのつながりが名張の財産です。今後、皆さんと一緒に「シティプロモーション」を強化し、転出した人も含め、市内外に地域の協力者を増やしながら、賑わいあふれるまちを目指していきます。

名張市の活力を失わせないよう、「新しい産業が息吹くまち」「若者が定着するまち」「だれもが安心して暮らせるまち」を政策の柱に掲げ、今年4月、第4代名張市長として初当選。現在、まちづくりの基本指針「名張市総合計画」の策定に向けて取り組んでいる

「シティプロモーション」で、地域の持続的な発展を



東海大学 文化社会学部 教授 河井 孝仁さん

近年「シティプロモーション」という言葉を耳にするかと思いますが、その目的は、地域の魅力を発信し、人口増加を目指すことに留まりません。まちに愛着をもって、自分の住む地域を良くしたいと考える人や、住んでいなくても、その地域に関わろうとする人など、「地域に真剣になる力」を地域の内外に広げ、「地域の持続的な発展」につなげていこうというものです。ところで、「まちへの愛着」はどこからやってくるのでしょうか。全国の事例からみて明らかなのは、「自分のまちを語る」ようになれば、確実に愛着が

生まれるということです。「自分のまちには何も無い」と日本中どこに行っても聞きますが、まずは、まちの魅力を語る人を増やしていくこと。その上で、魅力を発信できる場をたくさんつくって、住民自らが共感できる名張「らしさ」を示すブランドメッセージが生まれてくれば、さらに「シティプロモーション」の活動が広がっていくことでしょう。こうして地域に関わる人々の持続的な「ここに住む(関わる)幸せ」をつくり出す循環ができれば、まちの輝きは失われたいはず。

地域の持続的な発展に向けたシティプロモーション推進を図る「シティプロモーションアワード」を創設するなど、全国的なシティプロモーション研究の第一人者として精力的に活動している